

鼎 談 「祈るからだ」

竹 内 敏 晴 (南山短期大学教授)

大 森 正 樹 (南山短期大学教授)

中 野 清 (南山短期大学助教授)

「からだ」という問題は、実に多岐にわたる問題群を孕んでいる。と同時に、人間存在全体の根源にまでふみこまざるをえない、深さをひめた問題である。こういえば格好がいいが、つまるところ、どこから手をつけたらよいか見当がつかない問題だということである。これはまた逆に言えば、手近かなところからさぐりを入れてみるしかないということにもなる。

長年からだとことばをめぐるレッスンを中心に、「からだ」の問題を正面からとりあげてきた竹内の発案で、大森が書いた「からだもまた祈る」ーパラマスの身体観への試みー(南山短期大学紀要第16号, 1988)を手がかりにして、キリスト教の身体観の一断面を探ってみようということから大森と竹内の対談が生まれた。そこに編集者として同席していた中野が、西洋哲学の知識をもつということで話しにくわわって、鼎談の形となった。

一般にキリスト教の身体観として参照されるのは、西欧ラテン系の神学や哲学が大半であるが、ここではグレゴリオス・パラマスという中世紀の東方教会の神学者が話のきっかけになっている。従って、話題はおのずと東方と西欧の違い、仏教とキリスト教、「からだ」あるいは身体と、霊、魂、欲望のからみ、祈りと修業の問題、などなどへと果てしもなく展開してゆく。話題そのものは多様に展開してゆくが、話の流れ全体に通底する問題意識は、「祈るからだ」というものが確かにある、だが、しかしそれは何か。それはおそらく人間が霊も魂も欲望をも含めその全存在をかけて、まさに「からだ」そのものを巻き込んで、神なる存在と関わってゆくあり方の一つの表現ではないか、という予感である。人間と神との関わりを探ること、それがこの対話の流れの中での中心テーマであると思う。

グレゴリオス・パラマス (ca. 1296 ~1359)

ビザンチンの神学者 (東方正教会)。

「イエスの祈り」などの霊的修業によって、神の光を肉眼で見ることができるといふヘシカスム運動を代弁した。これに対し、神の光を見ることは不可能としたカラブリア出身のバルラームと論争。神の本質を人間はとらええないが、神の恵みのはたらき (エネルゲイア) は人間に接近可能であるという説をたてた。その際、人間のからだもこの神の恩恵にあずかると考えた。

【1】論文「からだもまた祈る」の意図——欲望と修行

竹内：大森さんは「からだもまた祈る」—パラマスの身体観への試み—という論文の中で、パラマスの身体観を述べることによって、キリスト教は一般に身体に余り価値を置かないという風にいわれているけれども、必ずしもそうじゃないんだという、誤解を解きたいという風におっしゃってますね。それで、まずキリスト教における身体観というのは、一般にどんなもんであったか伺いたいということが第一にあるんですが、そうなると、膨大な量になってしまうので、まあ、どこまでしぼれるかよくわかりませんが、とにかく一応いろいろ伺いたいと思います。

まずおもしろかったのはですね、人間は身体と魂からなるとされてきたけども、基本要素を十分にみたら人間観はなかったということを書いてらっしゃるんですね。で、真の宗教の立場は、これを十分に活かすことにあるだろうと言われる。これは基本的に僕はちゃんと言葉になりきらない部分も含めて共感するわけなんです。ただ、分かりにくいところもあって、例えば、「からだもまた祈る」と書いてあるけれども、私なんかがこの文章を読むと、ちょっと奇妙な感じがするわけです。「もまた祈る」とはどういう事かなあ？と。考えてみると書いてらっしゃるのは、からだ丸ごとでみるとか、存在全体で祈るとかいことなんだろうと思うんだけど。それが、霊と魂と身体から人間はなっているという考え方から「もまた祈る」という言い方になってくると、はてねと思ってしまう。

それで、私になぜ、伺いたいかっていう、問題意識をちょっとお話しておかないと分かりにくいかも知れません。私、「からだとことばのレッスン」というのをまあ二十年くらいやってきてるわけですね、で、からだの問題を広げて言えば、からだどころ、身体と精神の統合、近代文明の基盤である身心二元論を越えること、についてずっと考えきたわけだけれども、その問題の地平には、私は、自分の本の再版の後書で書いたんですけど、「からだの問題に手をつけるのは、地獄の釜の蓋をあけるようなもんだ」という気持があるんです。今の管理社会で、息が出来なくなってるみたいだからだをときはなっていくという思いがまず私にあるわけですがけれども、もう一方で、ときはなっていく

た先がどうなるかということですね。それを、まあ、非常に大ざっぱに欲望の解放みたいに一方で捕らえる人々もある、しかしそれは、見果てのつかぬひろがりがあると思いますし、また、解放と集中の訓練もあるところまでいくとコントロールがきかなくなるということがある。無意識とか狂とかいう領域の問題にもなるわけです。そのような「おのれ」に向いあい、より大きな存在において統合するというか、超えるにはどうしたらいいか。それで、私はその先に、義しさの根拠は…、「義」という字ですね。「義しさの根拠はからだにあるか」という問いを自分に投げかけた時期があったのです。で、いくら探ってみても、義しさの根拠は一般に言う身体自体に見つけることが出来ない、根本的には、いつも無記なる自然、でなければ無自覚な社会的慣習としての身体に還ってしまう、という実感があるわけです。もちろんこの「からだ」は個体ではなくて、間身体性ということを含むわけですが、只、これは全然別の体験ですけども、神を呼ぶからだがあるということも私は自分の体験で知っている。まとめて言えば、生きものとしての人間の生命力の回復から、キエルケゴール風に言うと、「精神としての人間」が立ち上ってくるのはどの地点からどのようにしてだろうか、ということ。もうひとつ言いかえると、人間の成熟という問題になるかとも思いますが。それで、まあ、仏教の唯識思想なんかの考え方とかいろんな事を考えてきたんですけども、その事と、パラマスの身体観が、実践的な意味ですぐに結び付くというわけじゃないけども、いろんな示唆を与えてくれるような気がしたのです。とりあえずは、まず問題意識はそういう事で、質問の前にここまで大森先生なんかおっしゃっていただけることがあればまずそれからお聞きしたい。

大森：そうですね。「もまた」というのは、受け取り方によっては奇妙な感じがすると思うんですけども。私はもっと単純に考えていました。先生がおっしゃったように、からだの方を低く見るという傾向が事実ある。魂が祈るんだ、とか、心が祈るんだ。しかしからだは祈るというような高尚なことはしないんだと。それに反発する意味といますか、そうじゃないということで、魂や心ばかりでなく、からだも祈ってるんだ。祈りは全人的な行為だということであるような表題にしました。

竹内：これはパラマスの言葉ですか、先生の？一番最後の文章を読むとどっちなのかなとちょっと・・・はっきりしなかったもんで。

大森：ああ、それは僕のです。パラマスがそういっているという、直接の言葉はないですね。そうですか。ただ、僕自身の問題としては、先生がおっしゃったような事とちょっと関係があると思うんですけど、やっぱり、欲望の問題といますか、それがどうも引っかかってしょうがない。で、それがずっと僕がキリスト教徒になってからの問題だったと思うんです。私は何というか昔から固かった。中学のとき洗礼を受けたんですけども。そのころ戒律というのは非常に厳しかったんですね。第二バチカン公会議の少し前です。金曜日に肉

は食べてはいけないとか。それから、朝ミサに行く前は前晩からは水以外は口に
してはいけないとか。それからなんかいろいろありましたね。非常に辛いと
きはありました、余談ですけれども。

竹内：なるほど。

大森：ある日、中学校の先生が僕を招いてくれてご馳走してくれた。金曜日で
した。僕が喜ぶだろう、とすきやきを。おいしいだろうと思って、うんと。僕
は困ったですね。でも食べなかった。後でそれを、何ていうか、まさに愛に欠
けた行いを自分がしたというような、心残りがしました。それくらいに守らな
ければならないというのがものすごく正面にあったんです。しかしその後だん
だん人間がいい加減になってきて、それで、守るということはどういう事かと
いうような事がまた問題になってきた。そうすると基本的に欲望みたいなもの
があるからそれを押さえるということで、戒律というのはやっぱりあるんでしょ
うし、そういう境地を越えていかんといけないんだけど、凡人は越えられ
なくてその線で見えないわけですよ。そこからどうしていかっていう
ことになると、その辺を右往左往しているだけで。そんなことがあって、この
欲望の問題というのは、本当にどう考えたらいいんだらうか。哲学的にも神学
的にも欲望を肯定するということは西洋の場合にはほとんど主流を占めない考
えなんですね。それからもう一つの問題は、修道者というものを考えたときには、
西洋の修行の方法とは東洋の場合に比べるとからだにあまり重きをおかない
んじゃないかという気がしたんですね。それで、西ヨーロッパのキリスト教
というのは、割合祈りとかいうのも、心とか魂とかを神の方にあげなさいとい
うような事の方に重点がある。ところが東洋ですと、からだをまず鍛錬して、
そのうち自からからだも心もこちらを向いているというようなところに持って
くるわけですよ。

竹内：仏教の修行はそうですね。

大森：これを考えたときに、キリスト教はからだを考慮に入れないで、ただ、
精神とか心とかだけでやるのかという疑問があった。論文にも書きましたけど
も、そういう風になっていったのは歴史的には、よくいわれるデカルト主義と
かそれからもう一つプロテスタンティズム——今までのカトリシズムに対する
反発心ですとか、それから、カトリシズムが墮落した形態をとってきたので、
もっと奮い立とうというので、プロテスタントが出てきた——というような事
が相まって、だんだん、何ていいますか、からだと心とを二分してくるという
方向が出てきたんですね。

竹内：そうですね。プロテスタントはそこへ押しつめている、というか。

大森：そういう風に精神とか心のみに関心が集中していく。でも一方で今の欲
望とかからだの問題は消え去るわけにはいかないですから、その底にずっと流
れてきている。それがおっしゃっていたようにこの時代になって、それが噴火
したんですけども、したのはいいけれどもどこへいくのかという、そういうと

ころにきてるんじゃないかと思うんですね。で、もう一つは、キリスト教の中にも、からだの修行といいますかね、それを本当に真面目に取り上げてやるのがあるんじゃないかという一つの希望を持っている。本当にあるんだろうという風に思っているんです。それは、少なくとも、西ヨーロッパのキリスト教よりは東方のキリスト教の方に残っているんじゃないか、という気がします。それは、正教会というよりも、もっと土着化したキリスト教の方じゃないかな。そういうデータはあんまりないんですけども。

竹内：あの、ロヨラの「靈操」なんかはそういう分類からいくと、どの辺に当たりますか？

大森：僕はその経験はないんです。あれはイエズス会のもので、イメージ…キリストの受難とかなんとかを、イメージとして思い浮かべるとかして。東方のキリスト教の場合にはイメージというのはあまり使わない。私達（カトリック）は黙想会というと神父さんがやってきて、たとえばキリストの生涯とか聖書の箇所を色々話してくれる。キリストはすごい苦しみに遭われたという。で、誰の為に苦しんでいるのか。お前達のためだ、と。そこで、その苦しんでおられる状況を我々が思い浮かべて、それで自分の身に引き付けるときに、これほどの苦しみをなんのために引き受けられたのかということから、自分のあり方を考えていこうとする。そういう事ですね。だけど東方の人たちはそうではなくて、むしろ苦しみを思うよりも喜びを思えという。しかし喜ぶだけでなく涙がでてくる。それはやはり自分が卑劣だとか罪人だとかいうことが余りにも大きな喜びが前にきたときに痛切に感じられる。そういう意味で、涙の神学などと言う場合もある。

竹内：なる程ね、イメージというと日本仏教でも、観佛観想に歓喜する方法がある。詳しいことはよく知りませんが、じーっと見つめて台座からイメージしていく、だんだん上へ昇って脚、腹、胸、頭とずーっと佛の全身をイメージの中にまざまざと見る。そういうやり方もあるわけですね。ところが、一方坐禅ではイメージみたいなものをいっさい捨てていくわけで、両方の形がある。ある意味で身体的なものを越えていくための方法としてね、いろんな事を考え出すんだろうと思う。先程言われた、東方のキリスト教の修行の土着的なところで私は引かれます。庶民にとってみると座禅にしても今の観佛にしても、相当専門的な高度な技術によってある状況に身をおかなければなりたないことであって、—— 勿論、そういうところを通過しなければ行けないところがあるのは確かでしょうが——、もっと身体的なものに密着した伝え方が探られたらありがたいという気持ちがどっかに私にあるんです。

【2】 霊と魂と身体 —— からだと魂と情念

竹内：論文に戻りますとね、東方の神父達の考え方でいうと、人は霊と魂と身

体からなるという言葉がありますね。これは、文章としてはわかりますけれども、いったいどういう事をイメージするかというのは私のみならず日本人にとって非常に分かりにくいところがあって、それを少し伺いたい。ただここではわかりかし身体という言葉をつかわして頂いてね、「からだ」とはいわないでおこうと思っています。というのは、私が「からだ」っていうと自分の独自のイメージみたいなものがありましてね、これはなくなった林竹二先生が言われたんだけども——はじめてお目にかかったころ、あの方はソクラテスの哲学専門の人ですから、『パイドン』なんかをネタに高校生に講義されるわけですよ。と、僕なんか、若いころから何十年ぶりかで、林先生に出会ってからもう一回『パイドン』を読んでみたらね、ものすごい反発があるわけです。毎ページごとに、そんなばかなと欄外に書き込む。つまり肉体とね、霊を分けて、肉体を捨てて霊の方へ昇って行くという様なことが出てくる、そんなことで成り立つ事があるもんかみたいなことをどうしても書き込みたくなる。ですから林先生がみてる私が「からだ」っていうのは非常に奇妙に見えたんだろうと思うんです、後で考えると、で、それから、何年かたった時に、林先生が、竹内さんがいう「からだ」っていうのは、ローマ人がいうアニマ（魂・生氣）と非常に近いようですね、という風な言い方をされたんですね。アニマルのアニマですね。それでね、亡くなられる前つまりそれからまた3・4年たってから、最後に対談させていただいたときに、竹内さんの言う「からだ」っていうのは、ほとんど魂とおなじですねという言い方をされたんですね。私は、なんて言うのかな、そういう面からの光の当て方で自分の「からだ」観を考えた事がなかったから、びっくりしたまんま、わかったこととわからないことが残っているんだけども。だから、私が「からだ」って言い出すところへ広がっていったらいいな気がするので、この場合はこの文章にあるように、「身体」という言葉に限定してやらせていただこうと思ってるんです。そうはいっても実際喋っているうちにどうなるかわかりませんけれど。

今度読み直してみたんですが、パウロの『コリント人への手紙第一』のところに「からだ」、これは口語訳聖書でからだとなってますけれども、聖霊の器としてのからだである。それが、キリストの「からだ」と一つになって行くんだ、だから最後にはキリストの「からだ」一つしかなくなるというような言い方がありますね。そのような言い方に含まれているからだの感じ、身体観がある。一方に、それとの関係なども考えたいけれども、とにかく東方の神父達の身体観というものがある。それを大森さんの目からみてどんな風に、感じておられるのか教えて頂ければ。

大森：そうですね。僕がそれをどれくらいよく理解しているか問題ですけど、この魂というのは、僕の理解では、いわゆる、情念みたいなものを含んで、非常にからだと密接に関わっているもの。からだをまさに物質と考えますね、物質というか物というか、

竹内：肉体。

大森：肉体という。そういう風なものと気持ちなんかが分離できない状況がありますね、魂とっている言葉の領域は、そういう様なこととして、

竹内：情念的な。

大森：情念的なものを含んでいる。

竹内：人は肉体と、情念的なものを含む魂とから成る。ということですね。あの、二つ質問があるんですが、これは後で伺うつもりだったけど、魂の三部分ていうのがあって、一番上には、理性的な部分がありますね。それも、日本人の通念からいうととても分かりにくい。魂っていうものをたとえば心というものに置き換えてみるとね、情念的部分っていうか、そういうものはよくわかるんだけど、理性的部分が魂の中に含まれてるっていう考えかたは、日本の考え方の伝統——たとえば本居宣長などを思い出しなくても——の中にあんまりないように私には思われる。ひどく素朴すぎる問いだけでもその部分について伺いたい。で、もう一つですが、その情念というのは、パッションですか？

大森：パッションという意味です。ええ。ですから、その魂の、ある部分は非常にからだと、不即不離みたいな形でつながってますね。で、魂という言葉は、今言いましたように、かなり範囲が広いですよ。そしてなおかつそれを統合しているような、あるいは制御しているような理性的部分、知的部分があるという考え方ですね。

竹内：私がさっき「からだ」といいましたけれども、今のお話に当てはめてからいうと肉体的な部分と、情念的な魂という部分をひっくめて「からだ」といっているようなところがあるんですね、私は。魂の理性的部分というのはその情念的な部分をコントロールする？

大森：コントロールする。

竹内：うん。

大森：これはギリシア哲学なんかがそういうふうに分けてるので、プラトンにしてもアリストテレスにしてもそういうふうに使ってますね。

竹内：そうすると、ここに書かれている、パラマスとバルラアムの対立っていうのは、魂の三部分ていう考え方の基本的な構造はそのまま、それがどう身体につながるかということに対する考え方の違いなんですね。

大森：そうですね。その点ではそうですね。

竹内：ちょっと途中で話をきっちゃったみたいなのがあるんで、もうちょっと聞かせて下さい。

大森：えーっと。魂は広い考え方だということが一つと、それから何か物質的なこの領域と、他方霊とっている、それを越えた領域があります。この橋渡しみたいな、といいますか、そういう所に魂を位置づけている。で、魂はこちらの方では非常に深くからだの部分と結び付いていて、からだと一緒にあって

動く。で、他方は別の領域に片足突っ込んでいっているような感じですからそれを見ながら、いろいろ内省するとかして、ちょっとやめよう、ああやっぱりそれでいいんだというような。

竹内：そうすると、霊と魂の関係はどういう風になっていきますか？

大森：霊というのは、これは、ちょっと難しいというのかな、確かに人間は霊と魂とからだから成る。しかし、これは単純に霊の部分がそれぞれの人に完全に備わっている、というよりはむしろ、開発されなきゃならない部分としてあるんじゃないかという意味で。それは、神の方からある意味で一方向的な恵み、聖霊の恵みでこの霊自体が賦活化されるというね。そうしたときには全てがここに統合されて一つのものとなる。

竹内：そうすると例えば、こういう言い方が出来るかどうか、自然的存在としての人間を一応考え、あるいは文化的を含めてもいいですけども、その場合の人間は、魂と身体とから成り、それに対して、霊は神からの恵みによってあるという、そういうことですか。

大森：それはちょっと自信がないですけども。一つの霊の萌芽みたいなものは、皆もっているんだ。それを、ちょっと話を前に戻しますと、アダムとイブが楽園にいて禁を破って罪を犯した。で、その罪を犯す前の状況はいわば霊と魂が完全に理想的状態として存在していた。ところが、罪を犯したときに、この霊の部分が弱くなってしまった。欠けたというか欠損した、そういう風になった。で、それを回復していくということがこの地上においてある意味で完全な人間になる道である、というような考えですね。

竹内：霊をしいて分けるみたいな聞き方をしましたのはね、仏教の唯識論の大成者の一人に、無著（Asaṅga）という人がいます。彼が攝大乘論の中で、第8アーラヤ識について詳しく書いている。私はろくに勉強できてないんですが、その中で重要なことだと思うのは、——（アーラヤとは、「蔵」、すべてを蓄えるところ、という意味ですが）第8アーラヤ識というのは深い無意識にある主体者の意識の根源、ということは三界唯心ですから世界の根源でもあるわけですが、これが第7マナ識を生み、自我意識を起すことになるというのですね、これを俱生、つまり生々世々絶えることのない我執であると言う——いろんな修行をしても、瞑想や禅定をいかに深めていってもこの、我執の「蔵」であるアーラヤ識に皆帰着してしまって、アーラヤ識そのものを変えること、つまり解脱の可能性は出てこないと言うのです。私流に翻訳すれば人間のからだの問題、それから文化としての「からだ」=慣習としての自然という問題を超越する要素はとでも出てこないということ。それでアサンガは、ただ「最清浄法界より流るところの正聞熏習、種子となるが故に、出世心生ずることを得」という。絶対の世界から流れてくるものに聞き入り、それに染まったことが種子となってアーラヤ識に蓄えられて、それから出世の心、つまり人間（世間）の領域から越えて佛になろうとする心を生み出すんだとこういう風にいつてる

んですね。つまり、一所懸命、自然存在ないしは文化的に形成されるものとしての人間の領域で考えてる限りに於いてはそういう事は起こってこないという考え方としてみると、これは、キリスト教の場合は霊という言葉になるわけですが、つまりは聖なるものが外からこちらへ入ってくるという形をとらなければ、どうにも始まらない部分があるということと、パラレルに考えてみることはできないだろうか、ということなんです。霊によって情念的部分が浄化されて完成されて行くっていう筋道をパラマスがいているわけですから、大森さんのこの文章によると。

【3】霊と肉

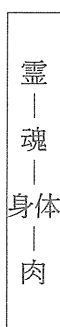


図 1

ちょっと乱暴なことを申しますけれども、そうすると、例えば霊があって、魂があって、身体があって、その身体の下にというか、この文章にでてくる肉というのがありますね。身体そのものは肉ではないという考え方がある。(まあ、身体そのまんま肉と考える考え方もあるようですけども。)ま、例えばそういうふうに霊と魂と身体と肉の四つに考えてみるとします。(図1参照)『ヨハネの福音書』の中に、ずーっと気になって一・二の牧師さんや神父さんに聞いてみてもどうもうまく私の気持ちにぴったりこないことばがあります。「人の子の肉を食らわずその血を飲まざる者は命無し」と。「人の子の肉を食らう」。普通にいえば、まあ、洗礼を受けて、聖体を頂いてということになるでしょうが、ヨハネの時代にそういうことがあったのかどうか僕はよく知りませんが、ただそういう儀式的なこと以上に、ゴルゴタのことがじかに私の胸に突き刺さってくるようななにかがあって、それをうまくいえないんですね。そういう時に使われる肉と血っていう言葉のイメージは、おとしめられた物としての肉という語感と違う気がするし、この場合大森さんが論文で肉という風に言われたときに、どこまで含んで、どういうこととして言ったんだろうか。

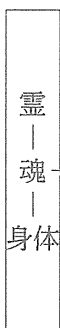


図 2

大森：それは神学者に聞かないとちょっとわからないんですが。私が書いたほうの肉は、一番下でなくて、霊がありますね、魂がありますね、それからからだがあります、で、この辺になんです。(図2参照)

竹内：情念的部分と、ある意味で平行なところに・・・

大森：平行に位置して、そして、要するに神より離反するというか、そのようなものを肉という言葉でまとめて言っているところがあると思う。そうでないと肉体が肉になって、全く下に行ってしまう。

竹内：はあ、はあ。と、では、魂の情念的部分というのはね、僕はちょっとよく読み切れなかったんですけども。論文の12ページに、悪しきものを憎悪したり神や隣人を愛するの魂の情念的部分の働きである、って書いてありますよね。人を愛し離反し一致し疎遠になるのもその働きであると。この情念的

部分というのはどういう働きを持っていてどれだけの範囲をいうのかってのがちょっと私読み切れなくて。しかし魂の情念部分によって我々は自分を引き上げる…。

大森：情念そのものはですね、いいとか悪いとかいうような判断が入らないです。これも僕自分流に読んでるんでしょうけど。例えば私達は怒ります。怒るというのはパッションですから、なにかある事態が起こって、それに対する一種の反応みたいなこととして起こっている。

竹内：行動と伴う。それで行動が終わると消えてしまうという――

大森：で、怒った気分とか嬉しい気分という限りでは倫理的な判断は全然入らないだろうと思うんですね。ところがそれを、たとえばこういったら自分は怒るぜというのがわかって、しかしその状況がくるとぱっと口から怒声が飛び出すということがありますね。だけどそれを、あっ、そこにとどまっちゃだめなんだというのもまたある一つの魂の理性的部分の働きといいますか。その時に、いやもうしょうがないから怒りに身を任せて、もうあらゆることを言ってしまったということになってくると、これは単に情念よりも、それとは違う部分が主導してるんじゃないかと。そこがこの肉につながって行く分かれ道になるんじゃないかなと思うんです。

竹内：これは、どういう風に言うかな。理性的部分ということを経験者としての生活の実感で考えていくとね、言葉としてはすぐに理解できるし、確かにそういうことが大事だということはわかるんだけど、自分自身の実践上のことで振り返ってみると、魂の中の一部分だというような形で本来人間にあるものだという実感はなかなかないわけです。日本的な慣習の中ではたとえば超自我という言葉にあてはまりそうなのがすべて代わってやっているって感じがする。東洋には、インドにおける仏教哲学や、中国の宋学など精緻な論理構築はあるのだけれども、究極においては、理性が真理を明らかにする、という考え方はないように思うんです。理性は「分別」つまり平たくいえば世間智であって、真理を直観するためには最終的には捨てられなければならぬもの、とされているように思います。理性が独立していない、というか。魂の理性的部分が本当に体感みたいに解れば逆に情念的な部分も明確にわかるだろうと思う。で、その理性的部分というのは一体どういうことか、あまりに幼稚な質問で、はなはだ申し訳ないんですけども。大森さんはどうお考えになるんですか？

大森：うーん。私はそこは単純に考えてるのかもしれませんがね。なんか人間にはいろんなものがある、その弱い強いといいますか、非常に情念的に強い人はいわゆる今言った理性的部分というのが影に隠れて、しかし逆の人はそれが表に出ているとかね。だけどしかしそれは訓練によって表に出させることが出来る、という風に受け取ってるんです。

竹内：なる程ね。ちょっとごめんください。横で聞いてらっしゃる中野さんは哲

学者としてどうお考えになりますか？

中野：そのお話のもう一つ前から話をすると、僕も大森さんのはちょっと読んで、まだ読み切れてないんですけども、霊と魂と身体があって、竹内さんはその下に肉というのを置いたんですけども、それ違うなと思って、読んでいる限り、彼が書いた文章からは明らかに魂のいわば横というんですかね、それとはちょっと違った領域として肉っていうのがあって・・・

竹内：違った領域。

中野：ええ。肉の領域と霊の領域という。霊と肉というのは対比項としていえるんだけど、魂と肉っていうのは対比項にならないという感じがすごいですね。

竹内：うん、対比項とはならないでしょう。

中野：それで、つまり霊と魂と身体。さらにいうと、その魂の中の三部分の非常に強い構造的なヒエラルキーがガシッとある。だからそういう上下関係を転覆していくっていう方向に向かった生き方なりそういう状態のからだのあり方というか心のあり方とか精神のあり方、さしあたってはなんといいけれども、そういう方向に向かっている人のあり方がまさに肉の領域に生きているという感じです。そして、そのヒエラルキーにしたがって、たえず霊的な領域、つまり神の賜として、イメージ的にいえば上から賜として下ってくるものに身を従えていくというか。魂なら構造がそれに反応している。それが霊の領域にあって、そういうあり方を真しに実現していくと霊の人っていうふうになっていく。キーとなっているのは、やっぱりこういう構造、ヒエラルキーが、まずあるということですね。自分がだからどういう構造を保持する方向でいくのか。それともそうでない、転換する方向にいったらいいかという、そこどころが問題化されていくんだらうと読んでて予想していた。で、魂の理性的な部分といった理性というのは、これも甚だしくわかんないですけども、もう一つ、今まだ話しに出てきませんですけども、ヌース（精神）が出てくるでしょ？

竹内：その質問は後にとっておいたんだけど、どうぞやって下さい。

中野：その精神と理性的部分とやってるものがまた違うと思うんですね。で、魂の三分説でいわれているような理性的な部分、気概的な部分と情念的な部分といわれているのは、ある種の宗教的な人間観で、他の要素をいっさい省いても成立してくるような、人間自身の自己了解としてギリシャ人はいいだした、と思うんです。でも、理性的な部分っていっても、二つのイメージが哲学書の中にある。一つは非常にインテレクチュアルな形で、つまり精神・ヌースというような方向でギリシャ人が発展させていった。知的な側面というか、思考という方向でのものと、もうひとつはここで話題となってくるような身体とか情念とかいうものと密接に関わって、人がまさに行為し、具体的に生きている場面の中でなおかつ問われていく理性という名で呼ばれている何かですね。例え

ばカントなんかでも、要するに、理論理性と実践理性と判断理性というような仕方で分けていきますよね。まさにそれは、この理性部分をさらに三分割していくみたい。そしてまたさらに当然統合化する局面があるからするんですけども、その中でとりわけ理性とか判断力の部分に関して非常に強く図式化されていく。その時には、とりわけ宗教で問われてきた理性的な魂の部分でいうので出て来るのは実践とか、具体的な判断の問題で。西洋哲学史に流れているのは、強くユース精神というのが一つとらえられて来るんだろうと思うんですけども、理性という場合もそれがさらに今言った三つの物がですね、入っていて、いまパラマスのこの理論の中でいえば、おもに問題化されてくるのは実践的な理性ですね。実践の場面で人が例えば怒ったときに、今、大森さんが例を挙げたみたいに、理性がある声を発してくる、といったときの理性といったものは、いわゆる知的な声とはやっぱり違ったなにかで、それはもっと実践の流れの中にあるものという気がするんです。

竹内：その意味の実践的な理性とは魂の情念的な部分を否定してアイデアを要請する、つまりある次元で自分と対立して、自分を自由にしていく働きを持ったものとして考えられるんだろうと思うんだけど、日本の社会生活の中では習慣によって形成された「自然」というべきものが、存在をべた一面に包み込んで支配しているように私は痛切に感じるものですからね、いわば、理性という、「自然」を否定してゆく働きが身の内にない。私自身を真っ暗なものに感じる。ただ、「からだ」が真に生きるためには、慣習としてのからだに反逆するからだがあると思うのです。それがどんなレベルで私にあるのか。それと関連してさっきの肉の、大森さんが言われたイメージ、中野さんも言われた、なかなかそれがわからないんですね。で、例えば、こういうことならばわかる。例えばさっきは霊・身体・魂と縦に並べましたね。それを、霊を上においてね、魂と身体をその下に横に並べるわけ。それで、その下に肉を置いてね、霊と肉が対称になって、タテに並ぶ。つまり霊-肉のラインと、魂-身体-肉のラインが十字に交叉する（図3参照）。こういう風になると私なんかにはイメージがいくらかわかるんですね。肉といわれるときに自分を霊と対比的に下へ落としていくというか、そういうイメージがあるわけで、さっきいわれたように、魂とほぼ並んだところに肉があるというイメージは、なかなか僕にはわからない。

中野：僕のイメージだと、霊・魂・身体という縦の図式というものが、人間の基本的な構成としてあるのだけれど、ごく大雑把な言い方をすると、それには肉型の生き方と霊型の生き方があって、肉型の場合当然縦軸は同じなんだけれどもひっくり返った形で置かれちゃって、人間がだから逆立ちして生きている、だからかなり苦しい生き方なんですけれども。（図4参照）

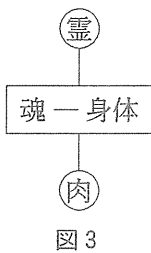


図3



図4

竹内：『神曲』の煉獄篇だね。

中野：そうそう。つまり霊の賜をすーっと受け取る、そういう生き方だったのが、墮罪、罪を犯した以後、この構造そのものが変換したんじゃないだけ

ど、人それぞれの転倒した傾きが非常に強く生まれてきている。それを直すことは自力ではできない。でも、どこかに肉型の生き方から霊型の生き方へ転換するきっかけがなければならない。そのきっかけを準備するひとつのやり方として、魂のいわゆる理性的な部分ですね（人間の自然的な部分という感じが近いんですけども）、それはもともとが上なんだから、その上がコントロールしていく日々の生活によって、自分の身のあり方というものをならしていく。ならしていくことによって霊の賜がすーっとより入りやすくなるというようなぐあいに…。なんかそれは、理性というものへの絶対的な信頼ですね。哲学者はどうしてもそういう方向で考えてきたように思うんです。

竹内：大森先生は今のお話に関して？

大森：竹内先生がお書きになったのはそういう感じかなあと。霊と肉が対立するといったのは非常にわかりいい感じがするんですね。ただ言われたみたいには霊と魂と身体と言うのは、やっぱりどうも順番で、とらえてしまう。そうするとこの肉の部分がどこへ来るのかといいますとね、どうも僕はこの下へは置きたくはないんです。これもよくわかるんですがね。ただ東方の教会はどう考えているかというところちょっと・・・簡単に言いきれない部分ですね。

【4】魂の三部分と自由意志

竹内：霊・魂・身体という風にヒエラルキーがあって、それに対して肉というものが霊と対比する形で出て来ると、脇に線を引くような形で中野さんが説明された。そうすると、結局のところ肉というものがかなり心理的なもののように感じられて来るところが私にあるわけです。私にとって肉というのはもっと根源的な、無明といいますか、身体と関連して非常にでかいものを感じられるところがありますのでこれは気長にゆっくりと伺いたい気がします。まず、魂の三部分についてもう少しちょっと考えてゆきたいんですけども。

大森：プラトンでは、魂の三部分と言うのは、理性と気概と欲求と言うんです。これはそのわけ方にぴったりしないんですけどね。

竹内：この気概という部分と欲求という部分が二つに別れるのはどういうことによってでしょうか。感じとしては分かるんですけども。

大森：プラトンの場合ですか？・・・

キリスト教の教父達は実は二つに考えていた。一つはやはり理性的部分ですね、一番上。それから、あと生命的な部分を司る下位の部分。その中にいわゆる気概的な部分とそれから欲求ですか。それを二つ合わせまして一つのものとして考えていたようです。

竹内：教父達は。

大森：はい。ただそれは、プラトンの的に言えば三つの部分だという。

竹内：あ、そうか。

大森：それが、いわゆる怒りとか怖れとか願望とか希望、大胆さと言うんですか。そういうのがいわゆる「気概」というものですね。それともうひとつ何か欲求の部分。

竹内：非常に古典的な考え方でしょうから、現在の精神分析の見方などとパラレルにならないと思いますけれども、なんか対比して考えるとこんな風に考えられるということがありますでしょうか。

大森：精神分析ですか。

竹内：精神分析と限定しなくても現代の心理学。

大森：今だと、例えばフロイトですとどういう風ですか？超自我ですね。そしてエスですか。理性というのが、超自我でしょ？

竹内：それだけでは始末がつかないでしょうけどもね。

大森：ま、どちらかといえばそうでしょうね。ピッタリくるかどうかね。

竹内：仏教の唯識だとわかりかしそこが近いとかね、パラレルとまでは言えないけれども、六識があって第七識に自我を形成するようなマナ識が考えてある。これでいくと魂の三部分の意味にもかかわって来るような感じが・・・

大森：そうですね。

竹内：そうすると、無意識の部分というのは第三部分だけに、大まかに言うと、対比できるのかなあという風な感じがしないことはなくて。

大森：そうですね、無意識というような考えは教父達にはなかったでしょうからね。それよりもむしろこの欲求だとか、気概だとかいう、ある意味では現われて来る面に注目している。むしろその無意識みたいなところと言うのは、僕は自分の考えですけれども、霊の方に近いような気がしますね。

竹内：肉というのは？

大森：肉というのは、そうね、やっぱり、肉というのは霊と対立するものとして捉えますから、無意識というようなものでもないかなあ。つまりなぜ霊は無意識かという風にいいますと、霊に神は働きかけているわけですから、それはある意味で意識するしないにかかわらず神からの働きかけというのはあるわけですからね。それがどう開発されるかということで、聖人にもなるし、平平凡凡たる人生も送るし、もっと別の人生を送るかも知れない。ですからその辺の無意識の部分が今流に言うと、開発されてくると、そこにもっと違う自分というか向上させていく自分の部分が現れてくるんじゃないかという意味で言ったんですね。ですから肉というのはこういう風に言うところの無意識とかなんかじゃなくて、もう人間が、アダムとエヴァ以来ですね、神から離反するというようなところにいつもくっついているような部分という感じがするんですけれどもね。人間が自由意志を持っている、与えられているという言い方に従いますと、その持っている瞬間から肉の部分がある。それは、神をどう捉えるかという問題は別にして、神というものに対してやはり自分を立てていくといひますかね、むしろ。非常にエゴイスティックな自分を立てていこうとするところ

が肉。

竹内：意識の方が肉で無意識が霊という考え方は初めて気付きましたが身にひびいてくるところがあります。そうしますとですね、霊への働かしかけを受ける人間の側の実践的な課題からいうと情念の部分を浄化していくとか、身体と情念と共通の作用があって、それが霊に向かって上昇していくといえますかね、たしか身体と・・・

大森：共通の働きが・・・。

竹内：下位の部分を理性的部分に従わしめる、このことが、身体と共通の働きをもつ情念的部分を浄化する一つのステップということになるわけですね。大森先生の最初のモチーフからいえば、つまりコントロールすることが出来るということになるんだろうと思いますけれども。僕はコントロールできないという気持ちがとっても強いんですよ。仏教では、無明ということになるんでしょうけれども。コントロールしようとして懸命努力するが、最終的にはついにコントロールできないものであると。コントロールしたつもりでいて、結局はコントロールできなかった事を後で発見するような、無限にコントロールを超えてしまうような非常に強い力を持っているものであるという感じがあって、そこが、一番考えていることなんです。それで、たしか意志によってエネルギーが逆流するという言い方をされましたね。意志というのほどに属するわけですか？それは。

大森：意志とはまたこれは別にあるんでしょうね。こういう分け方ではないんですよ。

竹内：魂の三部分とはまた別になるわけですね。

大森：でしょうね。それは教父達は割合簡単に書いてあるとか、たとえば欲望は悪いものと考えますね、で、悪いものとは本来は存在しない。だから考えなければ、悪というものは存在しない、実体としては存在しないから。そういうものに振り向きさえしなければ、それは全然現実の物とならないんだというところがですね、やはり人間にその先生がおっしゃるコントロールできない部分なのか、やはりなんかいろんな傾きがありまして、本来存在しないものをあたかも存在するかのごとくに考えているところに迷いがあるというですね、そういう風にしてしまうと、それが存在するようになるんだと。

竹内：インドの考え方の中にもそういう考えがありますね。

大森：そして簡単にいえば、その悪みたいなもの、まあ存在しないだけけれども、悪というものを想定して、こっちに善を想定すると、神は善だというわけですね。ですから、悪の方を向くんじゃなくて善へずっと向いているわけ。ところが、一たび悪の方を向いてこっちに何か魅力を感じてというところが非常に大きな力となって本来存在してないだけけれども、存在するものとして浮かんでくるからそれにとらわれてしまう。だけれども、善の方が悪よりも不等号が大きいんだという。そのようなことを非常に古い時代のディアドコスとい

う人が言ってるんですね。

竹内：悪は存在しないものかも知れない。そうかもしれないけれども、しかし一回向いちゃった人間にとってはそれはほとんど実在の物として見えるわけなんだよね。で、猛烈な力を発揮する。そうするとあらがう事が出来ない。例えば意志の力を奮い起こしてもあらがうことはとてもできない。善に向こうと思っても向こうへ引っ張られてしまうそういう力を持っている。それで、人間の意思の力ではこっちに向くだけの力を持ってないと覚悟したときにね、何とかなかな、例えば信仰というものは始まるんじゃないか。だけれどもそのじたばた全てを貫いて神の力が働いているんだということを、どっかで発見したときにね、信仰というものが成り立つんじゃないかという、そういう感じを持つんです。たぶん東方の神父さん達の言ってるのは、ただの理論だけじゃなくて、自分達において何か実践的にそういう実感を持ったんだと思うんですね。だからこれは、悪というものは本来はしかし空なるものであるという何か実感を持ったんだろう。その実感を持たなければそういう言葉がでてこないだろうと思うんだけど、その実感というのが持てるという可能性を、たぶんこの実践の中で、実現しているのか信じているのかそこがよく分かりませんがそれでも。それでプロセスについてお書きになった以上になんか具体的なことで話していただけることがあったら。

大森：ああそうか。実は私も知りたい。

竹内：それは実践だけで、文章の中に書いてないわけですか。

大森：そうですね。僕はよく読んでないので、なんともいえませんけれども。『アポフテグマータ』という本がありまして、これは初期の頃、砂漠で修行した人達の言行録で、見方によっては禅問答みたいなものがあるんですね。おもにエジプトの砂漠なんかで。ああいうものだとか割合そういうところは警句的に書いてあるんですね。それは詳しい説明は示唆してないんです。

竹内：禅問答もおんなじでね。後の人がいろいろ注釈をくっつけてるけれども。

大森：何か物に執着してる人がいると、自分の持ち物、食べ物とかなんかをね、全部からだにつけて歩いてこいというんですね。そうすると禿げ鷹とかなんかいっぱいよってきて、とうとう自分のからだまでつえばむような、そういう様なことをやらしてみたりとかね、そんな話が載ってますけれども。

竹内：なるほどなあ。東方の神父達は、純粋な神学ではなくて、体験を整理しているような事だろうと感じるし、だから私は引かれるところがある。それだけに分からないところが多いわけですね。

大森：私もそうなんですけれどもね。ちょっと話が横道にそれていいですか？アメリカのユダヤ系の宗教学者といいますが、ニューエイジの宗教なんかを色々調べてる人でJacob Niedlemanという人がいるんですけれども、ご存じですか？

竹内：名前は聞いた事がありますけれども。

大森：その人の書いてるのが私、割合面白いと思って、ちょっと共感するところがあったんですけども。いまアメリカや欧米の人達が東洋の宗教に魅かれて、禅をやるとか、昔、ヒッピーとかなんかで色々ありましたですね。で、どうして東洋の宗教に引かれるのか。西洋人にとって本来のキリスト教をもっとよく知れば、東洋まで行かなくてもキリスト教の中に自分の求めているものがあるんじゃないか。ところが現在の教会というか、そういうのは、それを伝えてくれない、表してくれないという不満があって、新しい宗教としての東洋の宗教に魅かれると。で、その人が言うのには聖書の中にキリストの言葉として「右の頬を打たれば左の頬を出す」とか、「上着を取られたら下着も出す」とかね、いろんな事が書いてある。で、それは結構だけれども普通できないというんですね。努力して努力して今度はそれを頑張りましょうとやるかも知れないけれども、本心からそうできないだろうと。そうすると、キリストの言っている、そういう境位と言いますか気持ちは相当ハイグレードな状況に達した人だけが出来ることを言っている、というんですね。例えば、「情欲を持って女を見ればすでに姦淫をした」ということに対してですね、そうするとみんなもう姦淫しているという。

竹内：私はあれはすべての人が罪人だという事を言ってるんだと勝手に思っていました。

大森：はい。そういう風に解釈は色々あるんですけども、それはそれとして、どうしてこんなグレードの高いことを要求したのかと。仮説なんですけど、彼の提唱するのは、中間のキリスト教なんですね。ということはもう少し我々の、普通のレベルよりちょっと上のキリスト教というものが考えられないかと。道徳的倫理的に。で、そこまでいったらちょっと努力すれば行ける。で、そういう状況にずっと全員がなって、更に何かメソッドがあればハイグレードになる。そういう事で色々東方の主教とかあるいは修道者とかカトリックの神父とか尋ねて歩いて、ジャーナリストですから、調べて、あるカトリックの司教と話したときに、その人ユダヤ人もんですから、「あなた達、カトリックの人達やキリスト教の人を見ていると、なんか行きずまったりすると、どっか秘密の霊的な指導してくれるところへ行って打ち明けると指導がもらえる。それで、また元気になって帰ってくるという風に思っているんですけども、そういうところあるんですか」と聞いたら、相手の司教さんが「それはどこですか？」と真剣に聞き直したというね。自分も知りたいくらいだと。そうすると、責任あるキリスト教徒自身が実は本当に祈りの指導とか霊的な指導とか分からなくて暗中模索している。それを考えると本当にキリストだったらちゃんとしたケアをしたんじゃないかというんですね。ある弟子達、これは非常に秘教的になりますけれども、異端的考えに近いんですけども、ある弟子達には秘密の教えを与えたんじゃないかと。例えば、こういう風な方法を取ればこういう瞑想が出来るとか、その瞑想によってこういう心境に達するという指導をしたんじ

ないかという。しかしね、それはすべての人が先生もなしに師匠もなしにやったら非常に危険なことになるという怖れが初期の教会の人達にあって、それは、脇へやっちゃったと。それで、なんか非常にエッセンスみたいのところだけ取ってきてですね、それが福音書にも残っている。それで教会はやってきた。だから、抜け落ちたところがどっかにあるんじゃないか、というそういう仮定をたてているんですね。それで、色々東方の教父達の祈りの本とかを調べるんですけども、やはりどこか隔靴搔痒というか、これが知りたいと思ったらその事が書いてないとか。それが現状なんです。

竹内：なるほど。おもしろいですね。今のお話を聞いていてね、ちょっとずれる話ですけども、この間、障害児教育のビデオを学生に見せましたよね。あれについてる本をあの時に僕は読み直したわけです。自分の文章も含めて。その時ちっと自分について気が付いた事があった。こういう風に図がかいてあるんですね。一般の健常者というのがこの丸だとします。障害者というのはこれだけの部分が三日月の影みたいに欠けていると、こういう風に健常者は見えている。ところが、実はこの欠けた部分の逆側にこれだけ広い健常者には見えない世界があるんだと。ま、こういう風に僕は書いてるわけです。で、読み直してしばらく経ってからふっと気が付いた。このところずっと考えてるんですけども、つまり自分はどこにいるんだろうと。自分が実は障害者であるという立場からあの文章を書いているわけですね、意識してないんだけど。そうするとね、自分の中にはうまく見えきらない大きな闇の部分があって、それを沢山抱え込んで、何とかそれを言語化するとか、努力していろんな事をやってきた。結局、この三日月形に欠けた部分を自分がある程度埋められたつもりでいた——つまり私の場合はことばが喋れるようになったということです——けれども、実は全然埋められてなんかいなかったんだと気が付いた。ここまで見えてきたみたいに思ったときに、本当はこの先に、健常者は、もっとずっと広大な世界を持っている。それを知らずに、私は、いつのまにか健常者になりえたつもりでなんか言ってたんじゃないかと。とすると、自分が自分の中に広がっているうまく言葉の届かない領域を自覚するとともに、それと対立、あるいは統合するみたいな巨大な言語宇宙とでもいうようなもの、精神の光りみたいなもの、を持たないと、自分はどうしてもこの中に閉じ込められてるだけということになりかねない。そういう自覚を実は数日前に気が付いたんです。それで気が付いてみると、実を言うと、例えば、ソクラテスにしても仏教にしても、全部知恵ということを言いますね。東方の神父はだいたいそういう感じではないけれど、神学みたいのを読んでみても、僕なんか生はんかですから、とにかく知恵ということを言ってる様な気がする。つまり、知恵というものを自分が獲得することによって、例えば、神に近づくといってもいいし、自分の中の闇を照らすといってもいいし。ところが、どうもそういう事では、いくらやっても及ばない闇というものを人間はからだの中に持っているんじゃないかという感じ

がひどく強いんですね。それは前からもってたことが今度はっきりしたんですけれども。そうするとね、僕はそこで初めて今までと違ってイエスの姿が見えた気がした。イエスは知恵ということを書いてるわけじゃないんですね。全くなんか別の事を言っている。イエスの言ってることばあるいは行為は、じかにこの闇を包み込むというか、じかにこの闇に触れるような、闇のからだを動かすっていいかそういうなにかであるのではないかという感じがこしばらくひどく強くなってくる。だから今の、探っていることは、非常にハイグレードだというだけけれども、ハイグレードじゃなくて私から言うともすごいローで、つまり、そのとこまでは知恵という形では届きようのないことをいってるといような感じがするわけです。イエスが言われることとからだという問題は僕は初めてどっかにつながってきたような気がしてますけれども。例えば、そういう事をパスカルなんかは感じながら何か言ってるという気がしないでもない。その存在の闇みたいなものに、直に触れていくってことを感じている感じがしないでもないですね。このところなんかろうろ考え始めた途端なので話がまとまりませんが。ニードルマンが言う秘教的なことの存在と関わりがあるような気がしたので。

肉ということについてさっきのお話で、エゴっていうものが、霊と対立的に生まれてくる何か肉だといわれたのを僕は正確にそのとおりでと思うから、こういうこととどういう風につながってくるのか私にはちょっとうまくいえませんですけれども。

中野：いま話しているのは、情念の浄化という問題につながっていると思うんですが、今の話しのはじめのほうで魂の三分説とはまた違った意志という言葉がでてきたでしょ？

竹内：念のために言うと、大森さんが意志によってね、エネルギーを逆流させるという言い方をされたんですね。さっきのこっち向かないでこっち向けと言うのもある意味じゃあ意志ですね。

中野：あれは、要するにギリシアとは基本的に違ったものとしてキリスト教がはいってから、教父達、特に西欧教父なんかには自由意志という言葉が非常に重要なものとして登場してくる。かなり決定的なものとして。人はそれぞれ自分の自由意志を持っているから、その自由意志を悪用するのではなくて神に向けて善用していくというような言い方がありますよね。そういう仕方は非常に大きなものとしてあるんだけど、西洋教父、例えばアウグスティヌスなんかだと要するに悪というのはこれは存在者ではないわけで、絶対に。ただ元々本来ある、神が定めたヒエラルキーがやっぱりあって、そのヒエラルキーを逆転させていくという、そこに悪というものがあたかも存在するかのごとく、悪というある種の状態みたいなものとしてのみあるんで、悪は実在ではないんだというのを発見するわけですね。それが一つで。もう一つは、彼はキリスト教徒になってからあと非常に大きな問題になって様々な形で論争されていく。あ

る人達はこれはやっぱり神にそういう悪から善の方へと、神の方へ向き直っていくのは、基本的には我々の自由意志の力によってと言う。それに対して、猛烈な反論を展開していく。それはグラティアなんだという。絶対グラティアということにおいてしかConversion、神に向き直るということは成立しないということを確認していく。善悪の存在問題と自由意志とグラティアの関係とは非常に大きなアウグスティヌスの場合問題の論点だった。東方教父も論点においてはおんなじですよ。でもきっと西欧教父の発想とは違った問題の解方の仕方というのがあるんでしょうね。

大森：今言われたように、その恩寵というかグラティアと言うか、それは前提として考えて、そして意志というものがあって、意志は絶対ではないですよ。絶対に自分の力だけでやるということではないですから。しかしやろうと思わなければ、振り返らなければいけないわけですから、向こうの方ばかり見てるのに、恩寵だけでできるかという、ま、キリスト教はやっぱり自分が向かないと話にならないでしょうね。

竹内：それは南無阿弥陀仏でもむづかしいところで、他力他力と言っているんだけど、信じてそれを唱えると、その信という一点は自力ではないのかという微妙な問題が言われるわけですね。信そのものは結果として佛から回向されたものでさっき出たグラティアなんですよ。自分がやるものではないんだけど、しかし、それじゃあ自然にそうなるかという、そうはいかない、と言う非常にむづかしい問題であって、論争がいつも絶えないようです。

中野：そのグラティアが働いてくる部分というのは、大森さんは霊っているのがきつとそういう領域であるという。そこがいま竹内さんのおっしゃった影の部分というか、要するに見えない。けれどもそれは私にとって非常に欠くことのできないとか、それがなければ私という存在はないというぐらいに重要だと思わすけれども。そういう見えない部分っていうものが想定されてないとやっぱりグラティアとかそういうものは考えられない。だから、自分で向き直るという部分というのは、先ほどの絵でいったら、いわば意識として反省していったときには確かにこの白い部分という、ただそれまでに全体としてのある種の変容への準備みたいなものがずーっとどっかで行われている。後で振り返ってみると、あれが確かにグラティアだったんだというときにグラティアという言葉が初めてでてくるけれども、その自分の中で動いているときは影です。無意識だし、見えていないからグラティアともなんともいいようがないんだけど、ある時ふと、ある地点にいる自分という自覚が立ったときに、まさに、そのふりかえったときにそのグラティアという言葉はまさにそうだったんだという仕方でのみ見えてくる。だからそうすると、現在形の形で動いているのは見えてないですよ。それを見えるといったときに何かの虚妄と言うかフィクションとしての宗教が成立してくるというね。新宗教ってそういうところがあるという感じがするんです。だから、人間には本当に見えないん

だけれども、それは全然見えないのかって言うと、あるしかたでみさせる仕掛はあって、意志っていうのもなんかそれとちょっと似たような構造がありそうに思うんです。よし、自分でやってやろうっていうのは本当に自分に見えている白い部分のところで、足をこうすればこうなるんじゃないかとか、手をこうすればこうなるんじゃないかとかそれはすべて自分の予測の範囲内ですよ。そこまで行くと。予測できないという予測の仕方なんです。で、そういうところでやっぱり絶対的に働いてないというか、この前竹内さんとちょっと話したんですけど、神っていうのがあるんだったら絶対外からくると、私の触れ得ない絶対の外、自分の中でどうのこうのっていうのじゃなくて、やっぱり外からくる。そうすると、もはやこちらとしてはとりあえず語り得ないものというか、そういうものから接近していくというやり方しかない。

竹内：そういう意味ではパウロの回心も、それ以前に救世主を迫害しようとしていた彼っていうのは、ひっくりかえってみればグラティアの中の出来事だったと言いうるということですね。

中野：どんどん話を飛ばしてしまったかなあ。

竹内：そうでもないですよ。浄土真宗には在俗の聖といってもいい妙好人という人々がありましたですね。そのおばあさんの歌の一つに、他力他力と思うてきたが、思うたことも皆自力、っていうのがあるんですよ。それを鈴木大拙が紹介してね。非常にほめた。読んだときに僕はちょうど逆の事が言えるような気がして。自力自力と思うてきたが、思うたことも皆他力と。どうも僕だとそういう構造になりそうな気がして。今、中野さんのお話を伺っているとそういう事が思われるんですけれども。情念部分の力を尽くして神を愛さなければならぬという言い方はこの文脈に入るかどうか。

大森：そうですね、これは一番むづかしいところですね

中野：三番目の言ったところへいくとまた戻れそうな感じがするんですけれども。肉っていう。

竹内：肉という言葉に訳されているからついでに欲がついて、肉欲という言葉とすぐ結び付くんですけど。肉というのはその部分を全然含まないわけじゃないけれども、それよりさっき大森さんが言われたところがポイントのようですね。

大森：そうですね。

竹内：仏教で言うと、やっぱり我執でしょうか？

大森：我執でしょうね、はい。肉という言葉があるんでしょうね。要はそれですぐに肉欲とかなんかそういうものとイコールになってしまってそういうものが肉だというんですけれども、なんか僕はどうもそうじゃないような気がするんですけれども。

竹内：肉欲というものの自体がね、人間結局文化的な存在だから、僕は肉欲というものを考えつめていくとその考えに近付いてくるという感じ方を逆に持つん

ですけれども。

大森：考えるという？

竹内：つまり、人間の生物的なセックスみたいにするんだけど、単に生物的なセックスなんかはあり得ないので、それがどうエゴイスティックな自我拡大になっているか。他者を見ないことであるか、他人を呑みこんでしまうことであるかっていう問題として広げていくと、おんなじような問題に行き着くと思うんですけれどもね。

大森：はい、そうですね。

竹内：ただ一般的に肉っていうと、非常に動物的な本能的な臭いを持ちやすいということで、ちょっとやっぱり肉っていう言葉は自分の中で考えながらいつもこずれていくというか、そういう感じがするんです。

大森：おっしゃってるとおりだと思いますね。そういういわゆるエゴイズムと言うか、そこと結び付いてくるんだと思うんですけど、その形態だけを見てというのが今まで多かった。エゴイズムという言葉は教父は使っていないと思うんですけれども。ただ教父の場合ですと、自分の思いとか好みとか考えとかそういうものを優先させてしまうとか、もうちょっと大きいのは神の位置へ自分を持ってくるというか。

竹内：そこまで行くとその先には他者という問題が必ずでてくる。そこまで踏み込むと話が膨大になってしまって、範囲をだいぶ超えそうなのでちょっと自省します。

大森：はい。

竹内：ただ、ちょっと話がずれますけれども、昨日中野さんと話してて、ブーバーの話がでて、ユングとブーバーのたぶん二通づつの往復書簡がありますね。ご存じですか？

大森：一回見たことがある。もう忘れちゃったけれども。

竹内：その原文をなくしちゃったんで今正確には分からないんですが、僕の中に残っている一番単純なこととして、ユングは無意識を探っていってみると、その先に神ということを考えなければ成り立たないことがでてくるという意味の事を言っている、私はそういう風に読んだらユング心理学の人がそのとおりですといったから、そんなにまちがってないと思うんですが。それに対してブーバーはそれは神じゃないというんですね。その対比が僕は非常に心に残っている。それは中野さんが言われたこととつながるんだろうと思うんですね。

大森：乱暴な言い方をするとブーバーは啓示宗教というか、そういうユダヤの宗教の考え方に非常に忠実ですからおそらくそういう発言がでてくるんだと思うんです。ユングの場合をとってみると、やはり自分の中を探って行ってそしてそこから先はどうしようもないという部分にぶつかったんだろうと思うんですね。それをユングは神だと言ってるんですけれども。僕の考えですけれども、

それが神につながる一つの道である。そこがそのまま神かどうか分からないんですけど、神につながっていく道であろうと。ですから多くの神秘家とかなんかはおそらくそこへ下って行って、そこで神と出会うということが行われたんじゃないかと、今のお話を聞いてそう思うんです。それが本当の神かどうかはちょっと即断はできないですけども。そういうところへ行かないと本当に出会わない。それを東方の教父流に解釈すると、それはカルディア（心の奥底）だと思うんですね。だから、人間の側もそこへ下っている。神の方もなんとかそこへ来て、初めて出会う。そこで確信が持ててまた普通の状況にもどる、という印象を受けるんです。

竹内：これはさっきの霊という言葉で言うとどういう風になるんですか？

大森：これはね、言いたいんですけどちょっと自信がないんです。霊がそんなものかどうかはちょっと分からないですけどもね。心という言葉でいわれるとびったり自分には来るんですけども。

竹内：私はどうも心という言葉は使えなくなっているの。さっき図を書きましたよね。僕は本当は今日うまく引っかけができれば言葉という問題についても話を聞きたいと思ってただけですけども。魂の三部分の下の部分までひくくめて、身体と一緒にして「からだ」と例えば名付けるとすると、第一部分から上全部含めて精神と言うか、その部分は、僕は言葉という感じなんですね。ロゴスというべきかわかりませんが、それじゃあ心っていうのはいったいなんだというね、ものすごくあいまいで、心というものは何にでも名付けられるけれども、考え分けていくとからだと言葉であって、つまり、意識に乗せられたものは全部、広い意味で言葉。言葉で及ばない部分がからだという感じ。言葉が探っていって言葉が自分を見いだして来る、来得るものが魂の三部分で言えば第二部分くらいまでなのかなあといったような感じを私は持つんです。

大森：そうすると、その時、心と言われるものはなくなって・・・

竹内：なくなってしまうんです。心という考え方自体がなくなってしまうわけです私の考え方でいくと。逆にしかしそれを言えば、言葉というものを実際に今僕が喋っているように生み出すものはなんだという話がでできますよね。現在の言語学でも色々あるみたいですけども。それは心と言わないのかといわれてもちょっと返事のしようがない。いまんところそんなところですが。からだが生み出したっていう言い方も成り立つでしょうが——。ただ、さっき大森さんが言われた、人間が心の奥底に入っていきますね、それは無意識という言葉を使うこともからだの奥底という言い方もできる。そこんところへ入ったときに意思とも関係するだろうし、グラティアとも関係する、からだをからだか否定してゆくという働きがおこるだろうか、そのポイントがあるような気がするんです。つまりからだというのはただ存在して自己充足してそこにあるものではなくて、からだがかからだを否定する働きというものは、ちょっと今うまく言葉で言えないんですけども、そういう要素というのがある、だから、そ

こに神がこられることがあるかも知れないという風で大森さんの話を聞いてて思いました。

大森：否定するというのはどういう感じなんですかね。

竹内：例えばアランなんかが魂とはまず自然を否定する何かであると。で、精神というのはすべてを嘲笑するものであると、言いますね。ま、とにかく肉というか、そういう物を否定する働きというものがある。それはからだの外のものとして一応考えられる。そういう外的なものとしてからだと対立する何かからだの中にあるものを本当に否定しきれぬかどうかという感じなんですね。たぶんそこにはドクサ（偏見）としての「からだ」という問題、慣習としての身体の吟味という問題がある。無自覚にそれに対して反抗し始めるもう一つの「からだ」がありうる。これではほんとに生きていない！って感じる「からだ」。それがなければ吟味など始まりようがない。僕などは。だがそれを自覚＝文字通りサトルとこまで至らしめるものはなにか。要するに、カルディアをからだの奥底とってしまえばそこまでキリストは降りてきて下さる、と言ってしまえばいいのかも知れないんですが…うろろと勝手なことをほざいて・・・。

大森：いえいえ。あれですか。先生にとってはいわゆる仏教的な捉え方の方がぴったりくる？

竹内：いや。いままで私は、仏教的なものは多少読んできましたし、仏教的な想念は日本語なり習俗なり風土の中に深く根を下している。ですからそこで考えてみるのが考えやすいということであって、ぴったりしているということとは違うんですね。特にさっき言ったみたいに知恵ではなくて、からだの闇に触れてくるというか、むしろそこにそもそもいるような、さっきイエスの言葉をそういうものとして言いましたけれども、そういう事を考え始めると相貌が違ってくる。

大森：アーヤ識とかそういう割と唯識的な考え方というのがいわゆる闇を照らす、闇の部分の照らすというようには考えておられないんですか？

竹内：そこはちょっとわかりません。唯識にもいくつか考え方があるし、大乘仏教が発展して行くと第八アーヤ識の底に佛性を認める、悉有仏性という考え方がでてきます。闇を照らす光としての佛性というより、闇がそのまま光であるという意味での佛性。が、私はそこまではなかなかいかない。それが分かったら悟りを開いた事になってしまうんだけど。

大森：そうすると、逆に質問なんですけれども。それが今先生がおっしゃっているように、意思でもって修行してもできない部分があるんじゃないかとおっしゃった事の意味ですね？

竹内：そうですね。

大森：それは、同じような問題はあると思うんですね、キリスト教にも。いかに修行を積んでもつんでも実は最後のところは積みきれなかったというか、そこで明らかにならなかったと。それは修行ではなくて本当にある一瞬の何かの

行い、あるいは見た、聞いた、喋った、何かしたということで一変にどんでんがえしが起こると。それはやっぱり実際あるんでしょうね。

竹内：禅の場合にはそれはありますけれども。

大森：キリスト教の場合にもやはりそういうのがあって・・・

竹内：それがグラティアの体験になるんでしょうね。あるだろうなということは僕ははっきりしているけれども。

大森：だから逆に言えば、あんまりむづかしい修行をしなくても、非常に単純なところで何かもうそのレベルまで上がってしまった人なんかもいるわけでしょうね。

竹内：それはグラティアのことだから人間の力の及ぶことではなくなるわけですから。禅の方だとね、六祖慧能の場合がそうかな。あの人は学がないということに伝説ではなっていて最近の研究ではやっぱり非常によく勉強していたらしいということになってきたようですけれども。薪をしょって売り歩いているのかな。それで街で金剛経を読んでいるのを聞いた。「応無所住生是其心」という句が耳に入った途端にぱっと佛怯が分かったというような話がありますね。寺に入っても出家まで行けなくて寺男として米をついでいる。ところが五祖弘忍が跡継ぎを選ぶために弟子たちに詩を作らせた。渡り廊下のようなところに白壁があってそこに一句書けと。一番上座の神秀が書くわけですね。「身はこれ菩提樹、心は明鏡台の如し」だから「時々勤めて払拭して、塵埃をして惹かしむること勿れ」つまり常に心を清く保つよう精進する、という修行のことですね。ところが慧能は字が読めないで先輩によんでもらって、別に一句を書いてもらう、「菩提もと樹なく、明鏡も台に非ず、本来無一物、いづれの処にか塵埃あらん」。これを見て五祖が、これにしようとして継がせる。だけれども、一番下を抜擢するのだから皆がどういう反応するかわからん、危ないからお前逃げろといって夜のうちに証拠の品を渡して逃がしたという話があります。むこうに悟りをおいて、修行によって近づこうとすること自体がダメなんだという考え方を確立したエピソードですが。

大森：もう一つ、分かりにくいところの一つは、東方の教父というかそういう人達は自分の事を語らないんですね。西方ではアウグスティヌスの『告白』みたいなものはありますけれども、あれは珍しいんで、ギリシアとかシリアとかああいう人達はそういう事は全然言わないで、別の事で書いているものですから、その辺の消息をどうしてつかんだのかということが分かりにくいんですね。

竹内：禅もおんなじなんですね。結果しか書いてない。途中のこういう苦勞をしてこうやってというのはいっさい書かないんですね。で、脇からみた人が伝記みたいな物を簡単にかいてるんですね。ということで推し量ることはできるけれども、その所までの苦勞の中でこういうステップがあって、こうなっているのは喋ることはあったんでしょうけれども記録には全くない。

大森：そうですね。

竹内：私の知っている老師は、見性と言うか、ここで悟ったということはわたしには全然ないとはっきり言ってますよね。例えばこれこれこういう体験みたいな事が自分にあったけれども、これは、非常に大ざっぱに言えば妄想の一部である、悟りではないと。そういう事とは違うという言い方でおっしゃってますね。

中野：アウグスティヌスの『告白』の場合なんかもよく言われている点ですけども、近代人の告白日記と言われているものとは相当趣向が違うんです。いったいあれは誰を主役に彼は書いているのかというと、自分のことを書くことに主眼があるのではなくて、神を書いているんだと。自分を舞台にして主人公としての神がどう働いたのかということを描こうとしている。自分の経験を題材にしていますが、意図はあくまで神を語ることにあって、やはり自分自身のことを告白するということにはなりませんね。

【5】浄化のプロセス

竹内：今の問題を含めて、情念的部分と、肉との関係というところから考えてみるとどうなるでしょうか。それが浄化されていくプロセスは一応論文に書いてみえるわけですけども・・・。

大森：これは浄化するという点で、かなりフロイト的だと思うんです。その情念は非常に強いエネルギーを持っている、で、そのエネルギーを結局どこへ向けるかが問題だという風に考えているんですね。ですから、それを昇華とかなんかとフロイトは言うんですけども、それと似ていて、今まで肉的部分にぐーっとものすごい力でひかれていたものを、今度、逆に転換させると、その逆の力で意気が上がってくる。そういう感じですよ。

竹内：その転換は、人間の魂の情念的部分に祈りによって神の力が働いてくるということですか？

大森：最終的にはそうなんですよけれども。それは修行の段階では何らかの仕方で意志的に修行するわけです。

竹内：といますのはね、私は「太陽は夜もかがやく」という映画を少し前にみたんです。これはトルストイの小説『神父セルゲイ』をイタリアの監督が、映画にしたんですね。主人公ははじめ皇帝付きの侍従武官かなんかで非常に将来を囑望されていたのが、婚約したときに、相手が皇帝の思いものだということを知ってね、それで一気に飛び出して修道院にはいっちゃうわけ。それで、そこでも秀でていて。それで山の中の小さな一人だけの隠棲所にこもる。そこで誘惑にきた女の人を泊めるのですが、肉欲を抑えるために自分の指を斧で叩き切る。驚いた女が世を捨てて修道院に入ってしまう。あの人は聖人だということになる。次々と奇跡が起る。例えば山賊の息子が、言葉がしゃべれないんですね。それを、あの神父さんここに連れてけばなんとかなると馬で乗りつけて

くる。本当にしゃべれるようになる、とかね。いろんな事があって、聖者だという評判がどんどんどんどん広がって、隠棲どころでない。行列が出来る。お堂が改築される。それでいやになってくる。山の近くの羊かいの中に紛れ込んで着物を取り替えて逃げだしてしまうというような幻想を描いたりするけれど、はっとしてみると、また向こうから聖者をたずねる人々の列がやってきたということになるわけですね。ある日一人の商人が少し知能が遅れた女の子を連れてきて、神父さまとにかく治してくれというわけで、夜よこしなさいということになって二人っきりになる。するとその女の子が無邪気というか小悪魔のように誘惑する。それで結局寝てしまうのです。次の日の朝、むっくりおきると、扉をばーっとあけて死のうと思っ、池に飛び込むんだけど、かつて泳ぎが得意だった人だったもんだからどうしても死ねない。浮かんでくる。そのままかつて自分が宮廷から飛び出してきたとき、神父になる前に世話になってた鳩を飼っている老人夫婦のところへ行くのです。かつて彼らが訪ねてきて自分達はいままで一緒に二人で暮らしてきたから、死ぬときも一緒に死にたい、神父さん私たちのために祈って下さいといっていた。いってみると二人同時に死んだということを知るわけです。神が願いをかなえられた。彼はそのままどこへいったか解らなくなった。ずーと後で聞くと村々を、何も持たずに貧しい乞食僧として回っていたようだというのが最後になっている。これは映画のストーリーです。トルストイの小説の方を読んでも、聖者になっていくときに、非常に肉欲に苦しめられているのです。外から見ると聖者だけれども、自分の肉欲に苦しんでじたばたしている。そこへたまたま小悪魔的に可愛い女の子が現れて墮落してしまうという形になるわけですね。ところが映画を見てみるとね、そういう風には全然見えない。肉欲という内面の戦いなんかは映画でとるわけにはいかないだろうとは思うんですけども。ただ映画でみると、聖者としてあがめられてゆく終わりの段階では、とにかくもうここにはいられないというからだけは実ははっきりしてくるわけですよ。もうイヤだという。羊飼いのイメージに現れてるみたいだね。そうすると、見ていると奇妙なことになるんですけども、意識の方は自分は聖者にならなければいけないと思いつめているわけだ。聖者っていうのはこういうふうにするんだろうということに従者に聞いたりなんかしているわけ。ところがからだの方はもう全くここにはいられないということがはっきりしてきている。しかし、意識に縛られて動きがつかないでしょう。そうすると、意識で縛っている自分からときはなつ力は自分からは出て来ないよね。別の凄じい力が働かなくては破れない。だから、肉欲に負けたとトルストイは書いているけれども、僕からいうとね、肉欲に負けたと意識されるような行為の中にね、非常にこれは乱暴な言い方だけれども、神の働きがある。つまり、自分の力ではどうにもならないものを、この世で成就するとしたら、それしかないという、そういう感じがあるんですね。乱暴な言葉を使えば、極限にいて自分を縛っているものを殺すためにね、

自分の力ではどうにもならないことを突破していくこととしてそこに働いてくる神の力だ、といますか。肉欲でさえもつまり、神の働きであるという感じを持っているんです。だから、霊と肉が対比項になっているということは解るけれども、そういう全部ひっくるめて神の働きということはあるんじゃないかと。

大森：そうですね。そういう考え方は、わかる気がするんです。しかし肉欲をも含んでというと、キリスト教の世界では、承認されるのは非常に難しいことですね。

竹内：それは仏教でも承認はされませんかでしょうけれどもね。

大森：例えば、今思い出したんですが、親鸞の女犯のように、観音が私を抱けというのは、それもある意味で条件付きにしても、ちょっと認められるか、認められないか難しいけれども、キリスト教の場合それは非常に難しいんですね。で、ひょっとしたら、今あるキリスト教を突破して、もっと大きなものつまり世界宗教になるのはそういう様なところかもしれないです。そういう考え方。まさに先ほど言ったようにキリスト教世界は神学的にがっちり出来上がっていますので、これを崩すというのは今までのキリスト教では考えられないテーマですね。ただね、本当に神様だったら何でもできるんだし、神の力というのは我々の想像を超えているんですからどんなことがおこったって不思議はないんですからね。

竹内：これを今度は人間的に解釈し始めたらどんなにでも墮落していくというか崩れていくことも確かですよ。

大森：そこをどうするかなんですけれどもね。ただ、そうかもしれないということは言えますね、それは。ただトルストイというのは非常に肉欲の苦しみというのに引っかかってしまって、『クロイツェル・ソナタ』という作品なんか全部そうなんです。トルストイ自身は正統のクリスチャンというとはちょっとちがったものがあって、あるひとつの問題に非常に捕らわれてしまって、にっちもさっちもいなくなったというようなところがありますからねえ。解決方法としてはたしてふさわしいかどうか問題はありますね。

竹内：今は映画の方です。ストーリーの基本はトルストイですけれどもね。

大森：ただおっしゃるように、こうならなきゃいけないんだという一つの枠がありますよね。で、これを破るのは、祈ったりとか、刻苦勲励の禁欲と修行しても、おそらく先生のおっしゃるように、解けないんじゃないですかね。

竹内：日本人では、さっきおっしゃったように、親鸞が徹底して突き詰めるわけですよそれは。なんとか超えようとして、彼は千日行もやっているわけだし、有りとあらゆる事をやって、駄目だーというところでひっくり返るわけですからね。日本人から言うと先に結論が出ちゃってるみたいなのがある。ストイシズムで修行するということはあるんだけど、やる先の事が見えてるという感じが、私なんかのからだのどっかにあるということもありそう

ですね。まあ、さっきおっしゃったように、親鸞なんて人が出てきたもんだから言い訳が出来易くなっちゃって、もうそれで駄目になっちゃってるということもあるとは思うんです。だから、歎異抄っていうのは明治までは公開されない極秘の文書なんですね。これに附した蓮如の文章はちょっと解りにくくて僕の解釈で間違ってるのかもしれないけれども、これは、みだりに見せてはいけないと、ものすごい危険な文章だという意味の事を書いてある。一回なるほどそうかとおもっちゃったらもうなんにも歯止めが効かなくなるというか。ただだからこそ信仰の極意なのに違いない。そういう事は感じます。

【6】祈り

竹内：しかし始まりは意志で流れを変えなければいけませんね。

大森：そうですね。そのためには祈りということを言ってるんですね。これは絶えざる祈りで、常住座臥ずっと祈っているわけです。特別の祈りの言葉があるわけですが。

竹内：はい。それを伺いたかった。

大森：いやいや、そっちでいいですよ。

竹内：イエスの祈りですよ、確か。確か呼吸と関係してるんですよ。で、どういう事であるのか。

大森：この伝統と言うのは非常に古いらしいんですけども、砂漠の師父たちの頃からで、エジプトとかですよ、コプトの人たちですよ、その辺りからずーっとシナイ山に移って、それから東方世界に移って、ロシアまで行ったのです。「イエスの祈り」、「心の祈り」とも言います。これは非常に簡単な文句、最初の頃はねイエスの名の祈り、「イエス・キリスト」でいいんです。一番単純なのは。ところが一応定式がありまして、それは、「我らの主イエス・キリスト、罪人なる我らを憐れみたまえ。」

竹内：始めは名の祈りですか。例えば、南無阿弥陀仏という言葉がある。ただ六字の名号だけですね。主の祈りだと、日本人の言葉としては、かなり知的に意味することが多くて、唱えること自体によってからだなんか振動してくるというか、そういう風にはなかなかならない。ところが、南無阿弥陀仏と言うのは、ものすごく単純ですね。呼吸と一体になる。で、門脇神父なんかは、最近単純な祈りですね。父なる神に対する祈りとマリアに対する祈りとを繰り返し繰り返し唱えるってことを考えておられるようですけれども。そういう事に関連して、最初に名の祈りだったのを聞いたからびっくりしちゃった。南無阿弥陀仏と同じですよ。

大森：同じですね。称名です。

竹内：称名ですよ。ま、南無というのがつくわけですがけれども日本人の場合には。

大森：それが一番基本的な形だというんですね。それから後今言いましたように、「我らの主、イエス・キリスト」と言う呼びかけがあって、「罪人なる我を憐れみたまえ」と言う。で、その「我らの主、イエス・キリスト」までを吸うんです。そして吐くときに、「罪人なる我を憐れみたまえ」と唱えるという風に言われていますね。

竹内：吸いながら言うというわけにはいかないから、心の中で言うわけですね。罪人なる我らのためにのところで喋るんですか？

大森：いや、これもやっぱり・・・

竹内：やっぱり声出さない？

大森：はい。一瞬息をとめる。ヨガみたいですけど。パラマスの頃こういう風にして、今でもこうなんですけれども、こうやっているんですね。

竹内：へそを見る。

大森：これでへそをみるというので、反対派の人々はオムファロプシュコイと言ってひやかした。色んなフォームがありまして、人のいない部屋に入って、心を神に集中して座って、心のある場所を見るわけですね。カルディアの場所を。そして、その祈りを唱えなさいという。

竹内：人のいない場所ですか？

大森：はい。『ロシアの巡礼物語』と言うのがありまして、これは、ヨーロッパでベスト・セラーになったものですね。ある人が本当に信仰を増したいと言うので、人に聞くとこの祈りをしなさいと言われて。それを例えば一日一万回とかやって。

竹内：やっぱり、南無阿弥陀仏の百万弁ですね。

大森：それで巡礼するわけですね。イスラエルまで行ってね。そういう話がロシアで非常によく読まれて、それが西洋に翻訳されて、日本でも以前出版されました。

竹内：ああそうですか。

大森：その中に、一般の人がどれほどこの境地に達したかということに、関心があるんですね。これに対して、ある学者はこれはクリスチャン・ヨガかという論文を書いている。それからもう一つ似たものはですね、イスラムにあると。スーフイズムの「ズイクル」とか言う祈りがあります。やっぱりこれは短い祈りです。「アラー」とかで、同じ様な文句で、それはどっちが先でどっちが後か解らないですけども、それとの関連を研究した本もある。いま出ているフランス語訳の『小フィロカリヤ』という本には、アラビアのその話を翻訳している。このような修行を集中してやっていると、体が暖かくなるんです。

竹内：それをインドで言えば、チャクラの一つですね。

大森：そうですね。それから精神医学でも、自律訓練。あれもやっぱり体があたまってくる。そういうのかも知れません。ただそれを、インドの場合はからだを正面にして見ますけれども、キリスト教の場合はやっぱりそこがネックら

しいんです。ですからこれは、単に一つの方法である。あるいは、これをやるためには、もちろん指導を受けなければならないとか、勝手にやっちはいけないが、しかしこれで全てと思ってはいけない。という但し書きが必ずつくんですね。それは、正教会の世界でそう言われているのか、西側の世界に移ってきて、それがついたのかまだ定かに言えませんけれども、実はそういう但し書がつくんです。

竹内：その話の、祈っているときに、どういうことが起こるか、何か現れがあったら伺いたい。

大森：本当の聖人は、光り輝くという。それはキリストがタボル山で変容した、その一つの写しみたいに光ると。これは19世紀のロシアの聖人で、サーロフのセラフィームというひとがいます。この人と、モトヴィロフという普通の人が、対談した記録がある。その人によると、その聖人は、「どうして私の顔を見ないんだ」と言った。「顔を見て話そうとしても見られない。まぶしくしてみられないんだ」と。「いや恐れてはいけない。私を見なさい」、「私を見るとあなたも同じように輝くんだから」。そういう様な話しもあった。その聖人は、熊とも話した、というか、熊がきても恐れないでいたという。それはもうずっとそういう修行をして、祈りが高まってくると、顔が輝いてくる。これは東方の特徴ですね、輝くというのは。最近そういうことがあるのか、聞いたことがないですが。サーロフのセラフィームはそういうことのあった最後の人もいわれているそうです。

竹内：輝くということが出てきたということは、とても面白いですね。僕が伺おうと思ったときには、むしろ内的な、内面的な意味でね、どんなことが起こるのかという風なことをおたづねしたんです。そういうのはあんまり残っていないのかも知れない。

大森：例えば、ビジョンを見たとか。そういうのはありますね。マリアのビジョンを見たとかですね。

竹内：禅の方では、ビジョンは捨てていく。それは全部魔境なんですね。

大森：全部退けられますからね。それからやはり心が集中してくると、神と一体になるような、そういう感じを持ちますね。

竹内：論文の中に出てきたことと言うと、バルラアムはそういうイメージを持つのは想像力だと言うが、そうではないんだというパラマスの反論の形で出てきますね。私はさっきちょっと言った、明恵上人の観佛、一所懸命集中して、観音を見るという。あれはどうも僕の感じからいくと、想像力だっていう気がするんです。ずっと、一つ一つ克明に見ていると、見えてくる。ということは、僕は、観音様ではないけれども、ある程度それは達成することが出来る。ある深い集中の中で、乱暴に境界線を引いてしまうとね、人間的な想像力、人間の限界の中で出来ることという気がして、本当の意味の超越の世界とは思えないと感じるところがあるんですね。ビジョンといっても、誰でもかどう分

ないですが、ある集中を持てば出来ることである、訓練すれば。という感じがするわけです。門脇神父が最近霊操について書かれた論文（神の言葉を聴く——イグナチオ・ロヨラ「霊操」の解釈学——）の中に、ロヨラの文を引いて、観想によってキリストが霊操者の心に現存する場合と、全く努力も原因もなく、神が直接に働きかけることによって信仰対象が心に現存する場合があると紹介しています。この一つ目と二つ目ははっきり違うものじゃないかと。この場合でも、輝くなんていうことになってくると、内的な想像力とかという問題では全くない。ですから、バルラアムに対するパラマスの反論は、一つのことを、こっちからみればこうだし、こっちからみればこうだという問題ではなくて、見るもの自体が違うんじゃないかという感じを僕は持つんです。たぶんバルラアムはまさに想像力の努力によって起こってくるものを見ていたんだし、パラマスの場合は、そうじゃないものを見ていたんだらうと。パラマスは「我々によるものではない」とはっきりいっているわけですね。我々によるものではないというのは、どういう経過でそれをいったかというのはこの文章の中では分からないですけども、そういう霊的な喜びが、実現されてくる筋道ですね。そこが私は非常に大事なことのような気がして読んでいたんです。

【7】身体と魂の情念的部分に共通の働き

竹内：もう一つ、この文章の中で質問させて頂くと、パウロの言葉が引いてあります。「身体と魂の情念的部分に共通の働きがどんなものであるかを、パウロの言葉を例にとって」とあるんですね。で、「誰かが弱っているなら、私は弱らないでいられるでしょうか。誰かがつまづくなら、私が心を燃やさないでいられるでしょうか」とある。これを聞くと、私なんかは身体と魂の情念的部分に共通の働きというよりは、他者と自分とつながる共生する状態というか、それがパッと感じられるものですから、この例証の理解がなかなかうまくいかない。「私の心には大きな悲しみや心の絶え間のない苦しみが・・・」やはり同じですね、「肉による同胞のためにあります」やはり、他者ですね。他者を共感するというか共生するというか。そういうものとして考えられる。だから、「身体と魂の情念的部分の共通の働き」というとちょっとこの言葉ではうまく理解が出来ないところがあるんですが、どういう筋道でパラマスがいったらうかという。

大森：それは、そういう先生のおっしゃった同胞に対する共感とか、そうしたものが、からだというコンテクストで考えてみると、魂の情念的部分と体とのアナロジーで言ってるんじゃないでしょうかね。

竹内：その後、「パウロに特徴的なこの激情的ともいべき感情の高まりが身体と魂の情念的部分に共通の働きであるとされる」とあるんですね。で、ここまでいくと、ちょっと手がかりにもなるような気がするんだが。後でも、

「魂の情念的部分の力をつくして神を愛すること」とできますよね。一所懸命頭で考えると分かる気がするけれども。

大森：この場合には最初に言いましたように、からだもまた動いているわけですね、動かされている。そして、魂の情念的部分も非常に高まっているわけですね。ですからそういう限りでは中間にある魂はこの両方の部分をつかさどっている。

竹内：それは、ほとんどパッションという言葉そのものもっている意味みたいなものですね。身体的な動きが、必ず一緒になってこなければ、パッションまでならないわけですね。

大森：はい。ですから、前にも言ったと思うんですけども、キリストが非常に心を痛めて泣くと言っているのは、はらわたがどうにかなる状態ですね。それは同情という一つの感情によってからだの臓器自体がそういう反応をしているという。ですから、からだごとの、あるいは魂と一緒に反応なんですね。それが激情的な部分というものと考えて頂いていいと。

竹内：日本語だとはらわたがちぎれるというか、はらわたが煮えくり返るという言葉になるわけですね。日本語でいうと、魂と身体とが結び付く共通部分だという考え方よりは、身体が動き始める。シャクにさわるとか、オモシロイなんてことばもそうだけれど、直にからだの動きや痛みがそこに「ある」ということ。それを近代人的な心理の用語で言えば、感情ということになるのだと。そういう言い方をしたくなってくる場所があって、魂と身体を分けてという考えが私にはなかなかしてこないんだけど。あ、そうか。やっと少しわかってきた。魂と身体という別々の独立したものの内に同質の部分が含まれているという文章だと思っていたけれども、共通部分というのは、重なりあった、ひとつにくっついてる部分という意味ですね……。この場合ですね、魂の働きは別に、言葉化されて表現されるとは限らないですね。

大森：言葉化という、魂はこうだという？

竹内：いや、魂というものを規定するという意味じゃなくて、魂の動きというか情念的部分の働きの表現というものは必ずしも言葉になるとは限らないわけですね。

大森：それはならないですね。それはね、先生がおっしゃっているように、からだと密接にくっついていると思うんです。ですから、先生はからだからこう、こっちからだだったらこう、でしょ？。僕は別の方面からというように考えているので、どうしてもそういう感じになる。内容は一緒かも知れないんですけども。アプローチはどうしても……

竹内：アプローチの方向が逆だと。言おうとしていることは同じ事だが別の面からいおうとしているということもいえないことはないという――

大森：と思うんですね。

竹内：今日はインタビューのつもりですから、これは本に書いてあることでほ

とんどつきるように思うんですけども、タボル山でキリストが変容するのを弟子達が見て、その時にキリストが変容するのを見れたのは、それは、エネルギーが、弟子達の方にもおよんだんだという言い方がありましたね。

【8】CONVERSION——神を求めるからだ

竹内：全く無明と言うべき「からだ」の根底でやっぱり神を求めるからだというのが、動きだしてくるときがあるわけですね。私はキリスト教についてはほとんど無知であった時にそういう体験が起こった。びっくり仰天したわけですけども、それは、かなり激情的な形で、動き出していた。そうすると、そういう「種子」がからだの中にやはりあるのかという風に、実は今度お話をしようと思っている内に気が付いたんですね。それは、魂の情念的部分に霊がエネルギーを及ぼしたという風な言い方をするのが一番近いような気もしないではないですけども。自分の中でのそれがキリスト教の目からみてどうなのかはまだ分かりませんが。前号の研究センター紀要に、私は実に中途半端な文章を書いたんですけども、「生涯の大事」という名で今昔物語の中にある源五郎発心の事について書いたんです。とにかくものすごい暴れもので、手下を何人か持ってね、荒し廻っているようなやつだったんだけども、ある時たまたま通りかかると、お堂のところに人がいっぱい集まっている。なんだなんだという、えらいお坊さんがきて、お説教していると、じゃあおれも聞くと、ずかずか入っていく。みんなは怖がって逃げるわけ。真正面に座って、やいちゃんと俺にも分かるように喋れとかなんとかどなるわけだ。で、坊さん、ガタガタ震えて、震えながら喋って、西の方に阿弥陀様という方がいらして、念じさえすれば、浄土へいけると。聞いた途端に、俺は坊主になる、と。刀をさっと抜いて、頭を剃れというんです。坊主が慌てて、いやご家族の方とも相談なすってな事をいうと、なんだ今の今までお前はよさそうなこと言っていて、俺がいま発心しようと思ったらじゃまするのか、首を切ってやるてなことになって。結局、坊さんブルブル震えながら頭を剃るわけです。それで、手下達を呼んでね、俺はこの場で出家したと。それで、全部着ているもの脱いで、鉦を持って、それでまっすぐ西へ向かって鉦を叩いて、阿弥陀仏ようほーいほーいと呼掛けながら歩き始めた。川があろうが山があろうが、とにかく西へというからまっすぐ一直線に歩くわけですね。それで、一番おしまい、ある寺によって布施をもらうのかな、とにかく食べものをもらうかなんかしてまた行く。住持が、七日たって後を追って行って見ると、海辺の崖の上かなんかの大きな木に登ってね、鉦を叩いて、阿弥陀仏ようほーいほーいと言っている。どうしたんだという、波の間から、阿弥陀様が返事をして下さる。だから一所懸命こう唱えているんだと。それで、いま返事をされるから聞いてなさいといって、阿弥陀仏ようほーいほーいという、波がザザザーと鳴っている間から、「ここ

にありー」という声が聞こえたという。それで、そのまま呼び続けて彼は木の上で死んでしまって、口の中から蓮華の花が一輪咲いた。こういう話があるわけですね。

この場合は修行なんてものがまるでないわけですがけれども、しかしさっきの肉欲の話じゃないけれども、聞いた瞬間に逆転が起こるといふ、そういうからだというのは何なんだろうと。そういうからだってのは、その前の悪逆無道において用意されたことは確かですよ。仏のことを聞いたのはその瞬間しかないわけで。ま、しかし子供の頃から耳に入っていることがないわけじゃないのかもしれないけれども。でも、その瞬間に逆転する。これは仏様の話ですがけれども。からだという問題に含まれている、さっき言われたエネルギーの逆転が可能になってくる用意のされ方といいますかね、そういう事は、実に不可思議なこと、大事な事で、一人一人にとって違ったところで起こりうるんじゃないのかなあというような事をでずっと思っていたんです。

中野：Conversion。そのまま直訳すれば。大いなる逆転、大いなる転換だと。

大森：それはからだがやっぱり逆転？

竹内：どういったらいいか。とにかく今の今まで刀を抜いて人を脅かして金を取ってた奴が、全部捨てて歩き始めちゃうわけでしょう。精神が変わったといえば精神が変わったんだけど。からだのあり方自体がかわっちゃったわけですよ。

大森：回心するのはからだごとだということでしょうね。

竹内：Conversion というのは回心と訳すわけですか？やっぱり。

中野：宗教的なConversionの場合には普通そう訳しますけれども。

竹内：要するに逆転だよ。心が変わるとは語義にはない。

中野：方向転換。ま、プラトンでも出てきますしね。洞窟の比喻の中に。

竹内：ああそうか。

大森：その時にはからだごと変わる。向きをかえる。

中野：プラトンもやっぱりからだごとだといいますね。

竹内：存在の仕方がかわっちゃうんだから、だから、存在自身が変わるといふ中からからだという言葉も含まれちゃうみたいな感じでいま聞いているんだけど。

大森：ですから、その意味で、魂とか精神が変わるといふわけです。それにとりなってからだもまた、変わる。

竹内：本当に私が無知すぎてキリスト教神学入門以前といった質問でしたけれど、どうもありがとうございました。